

ケアハウスの計画に関する研究

その2 ①郊外立地敷地内完結型、④教会隣接型の入居者の生活の比較

岐阜女子大家政○谷口京子 中野述代 静岡大教育 小川裕子

目的：本報告ではその1でタイプ分けした結果から、①郊外立地敷地内完結型と④教会隣接型の事例を一つずつ取り上げ、入居者の基本属性、日常生活及び住生活についての入居前後の変化、ケアハウスへの期待と満足感等について比較し、入居者の実態という側面からタイプ分けの有効性を検証するとともに、各タイプの特徴を明らかにする。

方法：調査対象は、①郊外立地敷地内完結型ではA、④教会隣接型ではBであり、いずれも三重県に所在する。調査は、Aでは個別に各室を訪問して調査票に回答してもらい、Bでは入居者が集まったところで（食堂）一斉に回答してもらった。調査時期は1994年10月13、14日である。調査票回収数は、A43、B29である。

結果：Aでは、入居者の選定で「障害者を優先する」方針があり、入居者の身体的な自立程度等についてBよりやや低い。家族・親族については、Bで未婚者がやや多い(13.8%)。A、Bともに入居者の9割近くが年金暮らしであるが、1カ月の生活費はAでは10～15万円に集中しているのに対して、Bでは10万未満から30万円以上にバラついている。入居直前住宅は、家族形態の分布に差はないものの持ち家率が、Aで約8割、Bで約6割と差がある。余暇のすごし方は、A、Bで入居前後とも多いのは「テレビ・ラジオ」「散歩」「一人でやる趣味や学習」である。その他、Aでは「茶飲み友達とおしゃべり」が多く入居後さらに増加している。Bでは「仲間と一緒に趣味や学習」が多く、同様に入居後増加している。外出の頻度については、Aでは「ほとんど毎日」が入居前4割強から入居後7%に落ち込んでいるが、Bではそれほどの大きな変化はみられない。